最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか①

鳳ナナ・作

ほおのきソラ・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ

第一章　最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか。　006
第二章　あんまりな仕打ちなのではないですか？　027
第三章　腹黒さんですわね。　044
第四章　忌々しいお方ですね。　062
第五章　ムカついたので全員ブン殴ります。　076
第六章　そんなに私は喧嘩っ早くありませんよ。　095

第七章　殴ってもいいのですか？　106
第八章　おすわり。　126
第九章　これは淑女のたしなみですわ。　147
第十章　私って意外と有名人なのですね。　170
第十一章　ついに出会えた私の運命。　194
あとがき　204

登場人物紹介

Scarlet スカーレット

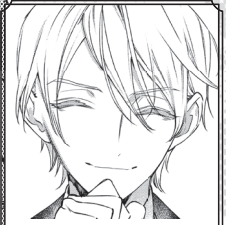
ヴァンディミオン公爵家のお嬢様。冷たくも美しい容姿から“氷の薔薇”と称される。しかし、実は別の二つ名があって…？

テレネッツァ

男爵令嬢で、カイルの恋人。スカーレットと婚約破棄するようカイルをそそのかした。

カイル

パリスタン王国の第二王子。スカーレットに婚約破棄を言い渡す。どうしようもないおバカさん。

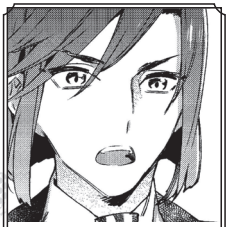


ジュリアス

パリスタン王国の第一王子で、カイルの兄。成績優秀、容姿端麗で女性からとても人気がある。将来有望な王位継承者。

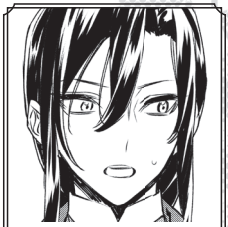
ナナカ

ヴァンディミオン公爵家で働くメイド。とある出来事からスカーレットにお仕置きされてしまう。



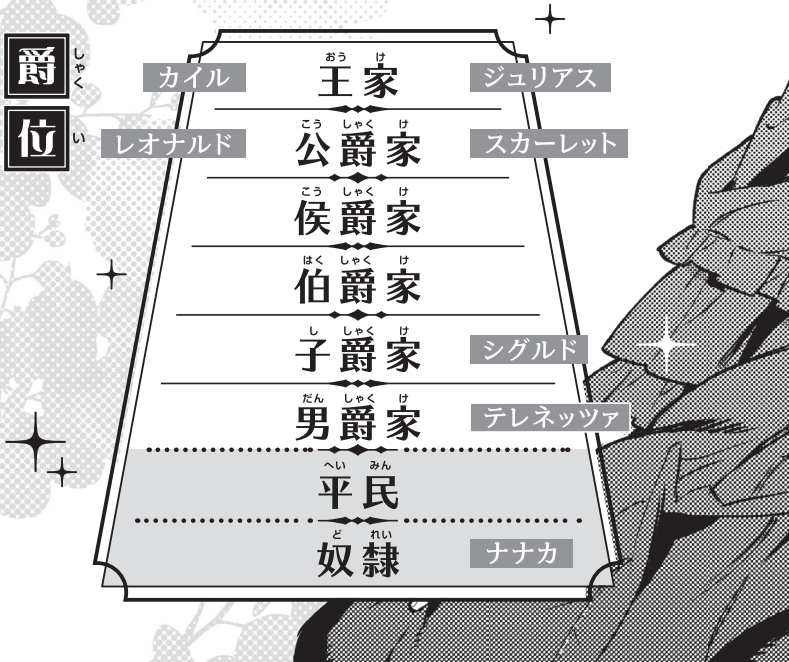
シグルド

騎士団長の息子。訳あってカイルの取り巻きをしている。



レオナルド

ヴァンディミオン公爵家のご令息で、スカーレットのお兄ちゃん。なにやらストレスがあるようで、いつも胃が痛いらしい。



第一章　最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか。

「……いま、なんとおっしゃいましたか？」

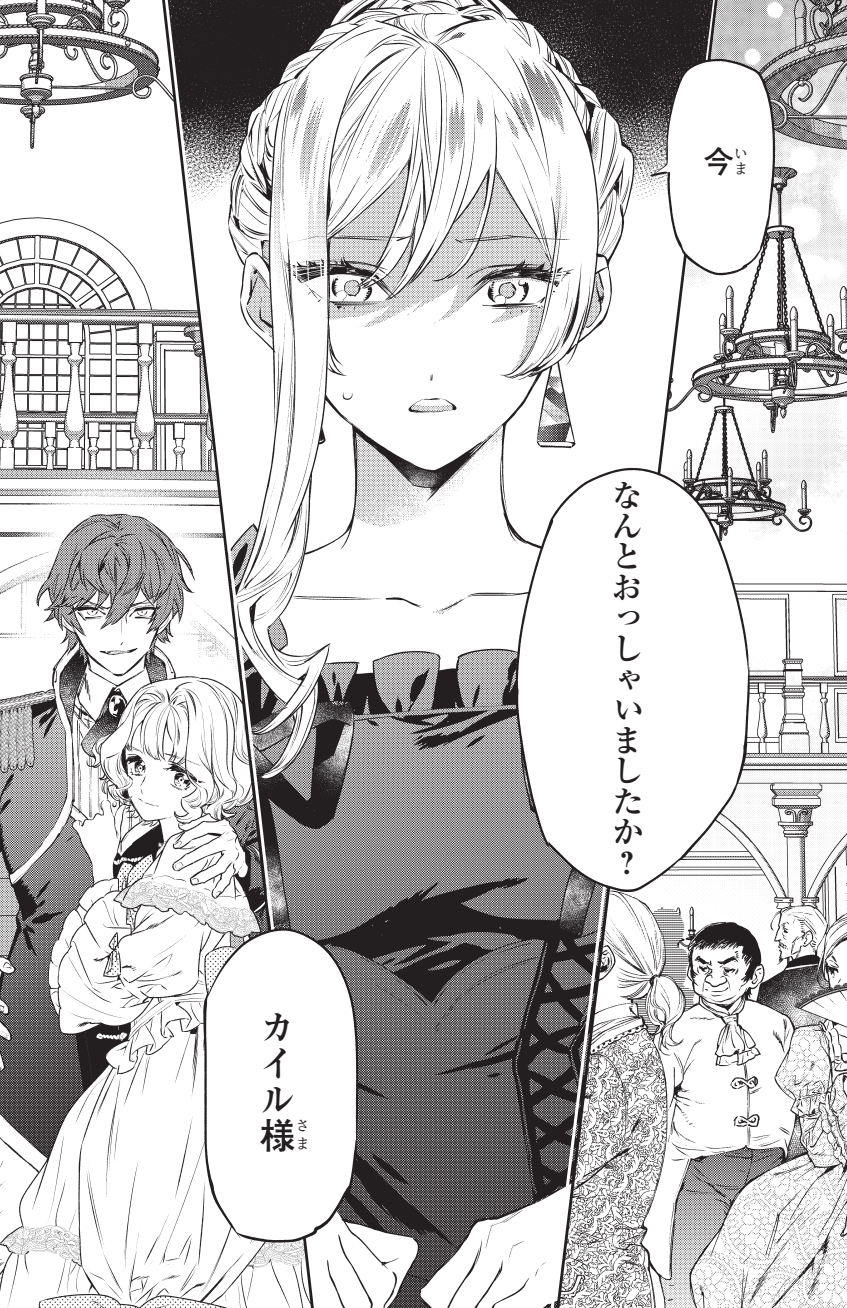
感情を押し殺しつつ、私は目の前の男性をじっと見据えます。

すると、夜会用の黒い燕尾服をまとい、踏ん反り返る私の婚約者――パリスタン王国第二王子、カイル様は改めて声高らかに宣言されました。

「何度でも言ってやる！　スカーレット・エル・ヴァンディミオン！　いま、この瞬間をもって、貴様との婚約を破棄させてもらう！」

明るい茶色の髪に、目鼻立ちの整った凛々しいお顔。

お父君である国王陛下譲りの鳶色の目は鋭く、十七歳になったばかりとは思えないほどの風格を持っていらっしゃいます。


今
なんとおっしゃいましたか？
カイル様

このように容姿だけを見れば、若かりし頃の国王陛下にそっくりだと言われているカイル様ではありますが、おつむのほうは少々……いえ、目も当てられぬほどに残念なお方だと、王宮内ではもっぱら笑いの種となっている始末。

一応婚約者である私としましては、そんな悪い噂が少しでもなくなるようにと、陰に日向にカイル様のフォローと称した尻ぬぐいをして、あちこち駆け回ってきたわけですが。

そのような努力も虚しく、よりにもよって上位貴族の方々が集うこの舞踏会で、カイル様はとんでもないことをやらかしてくれました。

「今宵、俺の招待でこの舞踏会に集まってくれた貴族の諸君、聞いてくれ！」

豪奢なシャンデリアに煌々と照らされた、華やかな会場。その隅々まで響き渡る大きなお声に、ダンスやお話を楽しんでいた方々は何事かとこちらに視線を向けてきます。

カイル様は会場中の視線が自分に集まったことを確認したあと、傍らに立つ、幼くも愛らしい顔立ちをしたピンクブロンドの女性を、人目もはばからず抱き寄せました。

そして、バカ丸出しのドヤ顔でこうおっしゃったのです。

「俺はここにいる女性、テレネッツァ嬢と新たに婚約を交わし、妻として迎え入れること

を宣言する！」
バカ王子のとんでも発言に、賑やかだった会場が一瞬で静寂に包まれます。
そしてしんと静まり返る中、純白のドレスを身にまとった男爵令嬢――テレネッツァさんは、カイル様に寄り添いながら満面の笑みで言いました。
「私もここに宣言します！　カイル様の新しい婚約者となって愛を育み、末永く幸せな夫婦になってみせることを！　みなさん、どうか私たちを祝福してくださいっ！」
一体なにをほざいていらっしゃるのかしら、このお二人は。
あまりの出来事に私が呆然としていると、周囲にいた貴族の方々が機を見計らったかのように、いっせいに拍手を始めました。
「美男美女同士、お似合いのお二人ね！」
「お二人の輝かしい未来に幸あれ！」
口々に称賛と祝福の言葉を投げかけるみなさまのお姿に、思わず眉をひそめる私。
仮にも一国の王子が、国王陛下の許可もなく勝手に婚約破棄を宣言するなど言語道断。
常識のある貴族なら、なんと恥知らずな真似をしているのだと、白い目を向けてしかる

べきでしょう。
ところが、いま私たちの周囲を取り囲んでいる方々は、婚約破棄したその場で即座に新しい婚約を結ぶなどといった、あまりにも非常識な事態に疑問さえ持たず、それどころか祝福していらっしゃる始末。
まったくもって理解できません。
というわけで、拍手しているみなさまのお顔をさり気なく拝見してみました。
案の定といいますか。
そこにいたのは、カイル様を日頃からなにかと持ち上げていらっしゃる、第二王子派と呼ばれる貴族の方々でございました。
つまりは、ただのサクラですね。バカバカしい。
一方、アホ王子のカイル様はおだてられてさらにテンションが上がったのか、テレネッツァさんの腰に手を回すと、感極まった様子で叫ばれました。
「おお、テレネッツァよ！　お前はなんと甲斐甲斐しく、かわいらしい女なのだ！　そこにいるかわいげの欠片もない、身分だけが取り柄の無表情女とは大違いだな！」

「あはっ。カイル様〝元〟婚約者のスカーレット様を悪く言ってはかわいそうですよぉ？元とはいえ、一応国王様がお決めになった婚約者だったんですからぁ」
テレネッツァさんが嘲笑を浮かべながら、露骨な上から目線で私を見下してきます。
正式な婚約の手続きも踏んでおりませんのに、すでに婚約者気取りでございますか。
いえ、いいんですけどね。
バカ王子をもらってくれるのなら、むしろ喜んで差し上げたいぐらいですし。
そのお方、それぐらいの不良物件ですから。
「ふん。今日に至るまでの十七年間、このようなつまらぬバカな女と、形だけでも婚約者同士だったことは、俺の輝かしい人生における最大の汚点だ！　その忌々しい銀髪も、吊り上がった青い瞳も、すべてが俺のかんに障る！　顔を見るだけでもむかっ腹が立つわ！」
そのお言葉、そっくりそのままお返しいたしますわ。
それに、たとえあなたに好かれなくとも、お母様譲りのこの銀髪と青い瞳は、誰もが美しいと褒めてくれますもの。
あなた一人に否定されたところで、痛くもかゆくもありません。

さて、ひとしきりこの方々の言い分を聞いてあげたところで、これからどうしましょうか。

一応私には、カイル様が暴走した時にお止めしなければならないという、婚約者としての役目があるのですが、はっきり言って面倒くさいことこの上ないです。

だって、この方が聞く耳を持たないことなんて、わかりきっているじゃないですか。

とはいえ、なにも言わないでいると、あとであることないことをでっちあげられてしまうのでしょうし。仕方がないので言いましょう。

「忠告させていただきますが、私とカイル様の婚約は王家とヴァンディミオン公爵家の間で、私たちが生まれる前から交わされていたものです。それをカイル様の一存で勝手に破棄できると、本気でお思いですか？」

私の問いにカイル様はフンと鼻を鳴らし、小バカにするかのように口元をゆがめられました。

なまじ顔立ちが整っているだけに、そんな表情も様になってはおります。

「破棄できるとも。貴様がいままで犯してきた罪を、いまここで告発することによって

な！」
「……罪？」
思わず聞き返してしまいました。
罪とは一体なんのことでしょう。いえ、とぼけているわけではなく、本気で身に覚えがないのです。
「しらばっくれるな！　すべてテレネッツァから聞いたぞ！　わが寵愛を一身に受けるテレネッツァに嫉妬し、貴様が学院内で数々の陰湿な嫌がらせをしていたことをな！」
激怒して真っ赤になりながらこちらを指さすカイル様に、私はますます首をかしげてしまいました。
一体このお方は、どこの世界のお話をなさっているのかしら。
「まったく身に覚えがないのですが。それと、そこにいらっしゃるご令嬢……テレネッツァさんといいましたか？　噂に聞いたことはありましたが、実際に顔を合わせたのは今日が初めてですわ」
「早くも馬脚を露したな！　同じ貴族学院に通っていて、しかも同学年の貴様とテレネッ

ツァが、互いの顔を知らないはずがなかろう！　嘘をつくのであればもっとマシな嘘をつけ！　このマヌケめ！」

そう言われましても……

バカ王子の支離滅裂な言葉に、私は内心ため息をつきました。

わがパリスタン王国の王都グランヒルデには、学院と呼ばれる教育機関が存在します。

正式名称、王立貴族学院というその施設では、魔法や剣術から王国の歴史、領地経営の方法といった将来必要となる知識まで、幅広く学ぶことができます。

また、学院に子供を通わせることは王侯貴族の義務とされており、貴族の家に生まれた子供は、十五歳からの三年間を、この全寮制の学院で過ごさなければなりません。

それは王族であろうと最下位の貴族であろうと例外はなく、カイル様も私も現在最上級生として学院に籍を置いております。

とはいえ、自分のクラスでもないお方の顔をいちいち覚えているわけもなく。

せめて校舎が同じであれば、顔ぐらい目にしたことがあると思うのですが、テレネッツァさんをお見かけしたことは一度もありませんし。

ということは恐らく――

「あの、テレネッツァさんは、一般科のクラスに通われているのではありませんか？」

「だからどうした！　もしや貴様、テレネッツァの成績が他の者に少し劣るというだけで差別する気か!?　己が特別科だからといって、調子に乗りおって……この差別主義者め！恥を知れ！」

他国からの留学生も合わせて毎年百人以上の生徒が入学する学院では、それぞれの成績や能力別にクラスが分けられています。

普通の生徒たちが集まる一般科と、成績優秀かつあらゆる能力に優れた者が集められた特別科。これらは校舎の場所が離れているので、各クラスの生徒が顔を合わせることなどまずあり得ません。

と説明したところで、頭が沸騰しているいまのカイル様には、なにを言っても無駄でしょうが。

ちなみにカイル様は、入学時こそ特別科のクラスにおられましたが、遊びほうけてどんどん成績が下がり、あっという間に一般科のクラスに落とされました。

まったくなにをやっているのやら。

「ふん。都合が悪くなったと見るやだんまりを決め込むか？　いいだろう。シラを切るというのであれば、貴様がいままでテレネッツァにしてきた悪行の数々を、ひとつひとつここで告発してやる。まずは――」

これ以上ないほどに自信満々なお顔をされたカイル様は、会場のみなさまに向かってはっきりと大きな声で語り出しました。

やれ座学のノートに落書きをしただの。

やれお手洗いに閉じ込めただの。

やれ悪い噂を流しただの。

極めつきは、私が彼女を階段から突き落としたというものでした。

違う校舎で、そもそも面識すらない方を、どうやって私が突き落とすというのでしょうか。

当然、告発された内容に具体的な証拠などなく、根拠はテレネッツァさんの証言のみ。

笑っちゃいますわ。そんなくだらない嘘を真に受けて、この私を断罪しようとするだな

……

都合が悪くなったと見るや
だんまりを決め込むか？

いいだろう
貴様の悪行をここで
一つ一つ
告発してやる

くすくす

彼女のノートに落書き！

お手洗いに閉じ込め

ひそ

ひそ

悪い噂を学院内に流し

さらには彼女を階段から突き落としたというではないか！

んて。
……いえ、違いますね。嘘か真か。そんなことはカイル様にとってはもはやどうでもいいのでしょう。
ただ私という邪魔な存在をどこかへ追いやり、殿方にかばってもらうのがお上手なこの男爵令嬢と結婚できれば、それだけで。
「……もう、結構です」
まだまだ続く、聞くに堪えない告発という名の茶番の途中、私はカイル様にそう告げました。
カイル様のくだらないお話を、これ以上聞いていてもなんの意味もない。そう思ったので。
当のカイル様はといいますと、私の冷めきった態度を見て、なにか勘違いでもされたのでしょう。ニヤリと口元をゆがめて、それ見たことかと言わんばかりのお顔でおっしゃいました。
「それは自分の罪を認めるということでいいんだな？」

「どう解釈してくださっても結構です。婚約破棄の件に関しましても、承りました」
「開き直りか。いじめなどという低俗な真似を好む、性根の腐った貴様らしい振る舞いだな。知っているか？　貴様のような女のことを、歌劇や物語では悪役令嬢と呼ぶらしいぞ？　悪人面の貴様に相応しい配役だな！　ふははっ！」
ひたすら責められることにうんざりして、私は視線をそらしました。するとカイル様に身を寄せたテレネッツァさんが、こちらにだけ見える位置から勝ち誇った顔をして「ばーか」と口元を動かします。
ええ、わかっていますとも。それがあなたの本性だということは。
「これでようやく、誰にうしろ指をさされることもなく一緒になれるのだな、テレネッツァ。昨日、『私が欲しいならスカーレットと婚約破棄してください』などと懇願された時は、どうしたらいいものかと悩みもしたが。いまとなっては、なぜもっと早くこうしなかったのかと後悔しているくらいだぞ。政略結婚などクソくらえだ！」
「うふ。カイル様は真実の愛にお気づきになられたのですわ。私たちはこうなる運命だったのです」

「くうっ、テレネッツァ！　愛しさが止められぬ！　ここでいますぐにでもお前のすべてを奪ってしまいたい！　いいか!?　いいよな!?　答えは聞かぬぞ！」
「あん、こんなところでいけませんわ、カイル様ぁ！」
バカ丸出しでイチャイチャする二人を冷めた目で見ていると、じわりじわりとある感情が漏れ出してくるのを感じました。
カイル様の婚約者として、王家に嫁ぐ身として、表に出してはならないと、幼少期からずっと抑えつけてきたその感情。
国王陛下、お父様、お母様。
もう、いいでしょう？　我慢しなくて。
「カイル様。この場を去る前に、最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか」
イチャつき続ける二人の間に、空気を読まず割って入ります。
愛の語らいを邪魔され、不機嫌そうなお顔でこちらを振り向かれたカイル様は、声を張り上げました。
「俺の婚約者を害した罪人という立場さえわきまえず、そのような要求をするとは、なん

と浅ましい女だ！　このバカ女が！　近衛兵！　この女をここから叩き出せ！」
カイル様の叫び声が響いて、すぐに鉄靴の音が聞こえてきます。
人波が割れると、そこには会場の入り口を守っていた警備の方々が集まっておいでした。
そうですか、この方々もカイル様の息のかかった者たちなのですね。用意周到なことで。
「まあまあ、カイル様。最後と言っているのだし、いいんじゃありませんか？」
なにを思ったのか、したり顔でなだめるテレネッツァさんに、カイル様が顔をしかめます。
「どうせ大したことではないでしょうし。なんなら願い事を聞くのを条件に、この一件はすべて自分が悪いと、国王陛下の前で罪を自白してもらうというのはいかがでしょう。それならば私たちにも利がありますわ」
「なるほど。お前は賢いな、テレネッツァ。よしスカーレット、いまの話は聞いたな？こちらの条件を呑むのであれば、貴様の願いとやらを聞いてやろう。寛大な俺たちに感謝するのだな」

「それで結構です。感謝いたしますわ、カイル様、テレネッツァ様」
一礼をした私は、震える左手をもう片方の手で押さえながら、ゆっくりとお二方に歩み寄ります。
「で、貴様の願いとはなんだ。金か？　宝石か？」
「……本当に、よろしいのですね？」
「くどい！　俺の気が変わらぬうちに早く言え！」
「では遠慮なく……テレネッツァ様、覚悟なさいませ」
「は？　貴様はなにを言って――」
怪訝なお顔をなさるカイル様に、私はいままで一度も見せたことがない満面の笑みを向けます。
「この位置まで近づけたのなら……絶対に外しようがありませんから」
そして私はおもむろに腕を振り上げると――
「申し遅れましたが、これが私の最後のお願いです。このテレネッツァをブッ飛ばしてもよろしいですか？」

答えを待たず、私はテレネッツァさんの顔面に、握りしめた拳を全力で叩き込みました。
「ぎゃあっ!?」
舞踏会の会場に、彼女の絶叫が木霊します。
鼻血を噴き出しながら吹っ飛んでいき、仰向けに倒れてピクピクとけいれんするテレネッツァさん。
「――はー、スカッとした」
万感の思いを込めてつぶやきます。
人を殴ると自分の心も痛いなんて嘘ですね。
だっていま、ムカつく小娘をブン殴った私は、とても気分がいいのですから。
「き、貴様！　な、なにをしている!?」
「腹が立ったのでブン殴ったのですけれど、なにか？」
そう答えた私に、カイル様はまるで別の生き物でも見るかのような視線を向けてきます。
まあそういう反応になりますか。
猫をかぶり始めてからもう十年は経ちますし、彼は、従順で婚約者を立てる私しか知ら

ないでしょうから。
七歳までの私は、腹を立てるとなんのためらいもなく人を拳で殴るものだから、〝狂犬姫〟なんてあだ名で呼ばれていました。もっともそのあだ名も、いまや被害者以外は誰も覚えていないでしょう。
「この場にお集まりになった第二王子派のみなさまに、言いたいことがあります」
くるりと華麗にターンして、周囲を取り囲む方々に向き直ります。
「あなたたちは最低の豚野郎です」
私がこんなにも自分の気持ちを押し殺して、国に身を捧げるつもりで生きてきたというのに。
なにもかもをあきらめて、人形のように、ただただ言われるがまま苦痛に耐えてきたというのに。
他人の甘い汁を吸うことしか考えていない豚どもめ。ただ自分たちがよく思われたいがために、このふざけた婚約破棄に加担して、私のいままでの苦労をすべて台なしにしようとするとは。

こんなの、ムカつかないわけがない。
「だから――全員ブッ飛ばしてもかまいませんわね？」
スカートのポケットに手を入れ、手袋を取り出します。
たくさんのお方を殴るのですから、手が傷つかないようにちゃんと保護しなくてはいけません。乙女のたしなみですわ。
「それでは、はりきってまいりましょうか。はじめに殴られたいのはどなたですか？　手を挙げて前に出てきてくださいな」

第二章　あんまりな仕打ちなのではないですか？

私、スカーレット・エル・ヴァンディミオンが、このたび感情を爆発させた理由。それはテレネッツァさんとバカ王子に腹を立てたからなのですが、私の怒りの度合いを伝えるには、過去に遡る必要があります。

パリスタン王国では、社交界デビューは早ければ早いほどいいとされ、ほとんどの貴族の子供は六歳になるまでに礼儀作法を叩き込まれて、夜会に出席します。

けれど狂犬姫と呼ばれていた私は周りより遅れて社交界デビューをすることとなり、七歳の時、お父様と一緒に初めて夜会へと足を運んだのです。

頭上を仰げば、きらめくシャンデリア。

豪奢なドレスを身にまとった淑女の方々はたおやかに扇子を傾け、燕尾服を着た殿方は

ワインを片手に華麗にほほえむ。
そんな目も眩むような世界に酔ってしまい、早々に会場の隅で休んでいると、同い年くらいの男の子が話しかけてきました。
「おい、お前がスカーレットか」
明るい茶髪を短く切り揃えたその子は、顔立ちこそ整っているものの目つきが悪く、いかにも粗暴な印象を受けました。
ですが、どんな相手の前でも淑女としての立ち居振る舞いを忘れるなと、家庭教師にみっちり叩き込まれていた私。教えられた通り、ほほえみながらスカートの裾をつまみ、完璧な所作で一礼しました。
「はい、私がヴァンディミオン公爵家の娘、スカーレット・エル・ヴァンディミオンですわ」
そんな私の挨拶を見た男の子は、フンと小バカにするように鼻を鳴らすと、次の瞬間とんでもないことを口にしたのです。
「お前バカだろ」

おい
はい
私がヴァンディミオン公爵家の娘
スカーレット・エル・ヴァンディミオンですわ
淑女らしく
お前がスカーレットか
お前バカだろ

「……えっ？」
突然罵倒されたので、一瞬理解が追いつきませんでした。
バカって言われた？　私が？　なぜ？
「俺はスカーレットか？　って聞いたんだから、返事は『はい』でいいんだよ。誰も自己紹介しろなんて言ってないだろうが、バカ者め」
あまりな物言いに、思わず閉口してしまいます。
確かに、はいと一言でよかったかもしれませんが、それでは少々礼を欠くというものでしょう。
そんなこともわからないなんて、この子は一体どれだけ程度の低いお家のご子息なのかしら。
眉をひそめると、男の子はこちらを指さしてさらに言いました。
「お前、今日から俺の付き人な」
「はあ？」
さすがにこれ以上は黙っていられません。

「ふざけないで。誰があなたみたいな無礼な子供の付き人なんかするものですか」
「なんだと！　たかだか公爵家の娘ごときが生意気な！」
「公爵家ごときですって？　ではあなたのお家は、さぞご立派なのでしょうね？」
「俺の家はこの王国そのものだ！」
あきれてしまいました。言っていることがまったくもって意味不明です。
「付き合っていられませんわ。さようなら」
「待て！　逃げるのか！」
大声を上げながらうしろをついてくるその子に、私はもう我慢が限界に達しそうでした。その場で振り返って、物理的に黙らせなかった自分に拍手をしてあげたいくらいです。
そして当然のことながら、夜会でそんなふうに騒いでいる子供がいれば悪目立ちするわけで……
騒ぎの渦中にいるのが私だと気づいたお父様が、こちらに歩いて来られました。
「お父様！」
助かったとばかりにお父様に駆け寄り、その大きな背中に隠れます。

「どうした、スカーレット。一体なんの騒ぎだ」
「変な子がずっと付きまとってくるの。追い払ってくださいませ」
お父様は私を追いかけてきた男の子をチラリと見ると、ヒゲをたくわえた厳しいお顔を、さらに厳しくしかめておっしゃいました。
「スカーレット。あのお方への無礼な言動はつつしめ」
「え……？」
助けてくれると思っていたお父様に拒絶されて、私は困惑します。
そして、次に耳に飛び込んできた言葉に絶句しました。
「あのお方の名前はカイル・フォン・パリスタン殿下。わが国の第二王子にして、お前の婚約者でもあるお方だ」
直後、私はショックのあまり気絶しそうになりました。
私に婚約者がいるとは聞いておりました。
そしてそのお方が、この国の第二王子だということも。
私とて公爵家の娘。家が決めた相手と政略結婚することには、なんのためらいもござ

!!
あのお方への無礼な言動は慎め
え？
にいっ
あのお方の名前はカイル・フォン・パリスタン殿下
お前の婚約者であるお方だ
お父様…

いません。
たとえお相手の見た目に多少難があろうとも。性格的に気難しい方であろうとも。鉄の心をもってこらえましょう。
そもそもこの政略結婚を受け入れるべく、狂犬姫と呼ばれていた自分と決別し、夜会にも出席したのですから。
ですが、お父様。これはちょっとあんまりな仕打ちなのではないですか？
第二王子のカイル様が、挨拶もろくにできない、常識のないクソガキだったなんて、私は一言も聞いておりませんでしたよ？
「隠れても無駄だ！　お前は今日から一生俺の付き人だからな、バカ者め！」
――こうして、私の地獄の日々は始まりました。
私が夜会に出席するたび、カイル様がしつこく付きまとってくるようになったのです。
それも、ただ付きまとってくるだけではありません。
時には人前で私のことをひどい言葉で罵倒してきたり。
また時には、お前の銀髪が気に食わないと髪を引っ張ってきたり。

ありとあらゆる地味な嫌がらせをしてくるようになったのです。
さすがに目に余ったのか、注意してくれようとしたおとなもいました。けれど、『自分に逆らうとどうなるかわかっているのか』とカイル様が恫喝する始末。
結果、誰もが彼の行いを見て見ぬフリするように……
もちろん、お父様には婚約を白紙に戻してほしいと、何度も何度も懇願いたしました。
本来であれば、いち公爵家が王族との婚姻を白紙に戻すなど、恐れ多くて口にもできないことです。
しかし、私に限ってはそれを口にできる、ある理由があったのですが――
お父様は、『王家との婚約ゆえ、それだけはできない』と、絶対に首を縦に振ってくれません。
その頃になると、夜会に出るのも嫌でした。けれど夜会を欠席すれば、カイル様は家まで押しかけてきそうです。それだけは絶対に阻止したくて、なんとか出席し続けました。
そんな辛い日々も一年、二年と続いていけば段々と慣れていくもの。
いつしか私は、カイル様にどんな悪口を言われようが、暴力を振るわれようが、まった

く動じない鋼鉄の精神を身につけておりました。
やがて、なにをしても無反応な私に飽きたのか、カイル様は夜会に出席しなくなり、顔を合わせる機会は徐々に減っていったのです。しばしの間、私の怒りのゲージは増えることがありませんでした。
けれど時が流れて十五歳となり、学院に入学したところ――再び怒りに耐える日々が幕を開けました。

入学式の日の朝。
臙脂色の制服に身を包んだ私は、ふと壁にかけてある地図に目をやりました。
数多の創造神が塵芥から作ったと言われている、大陸ロマンシア。
この大陸には、大きな力と領土を持つ四つの大国が存在しています。
東の帝国ヴァンキッシュ。
西の神聖皇国エルドランド。
南の連合王国リンドブルグ。

北の公国ファルコニア。
これらの国々は、隣接する国とたびたび戦争を起こしては、領土を巡って血みどろの争いを繰り返してきました。
そんな中、四方をこの四大国に囲まれているにもかかわらず、滅ぼされずに残っている国があります。それが私の生まれ育った国、パリスタン王国でございました。
わが国は四大国のうち三国と同盟を結んでおり、外交政策はそれなりにうまくいっています。
これで内政も安定していればわが国の将来も安泰と言えるのでしょうが……
パリスタン王国の内部は、王位を巡る争いで非常に乱れております。
王国には年を同じくする二人の王子がおり、正妃の息子である第一王子が次期国王になる予定でした。
ですが、不正を決して許さない第一王子の姿勢に、一部の悪徳貴族たちは自分たちの権利と利益が脅かされると感じたらしく、愚かな第二王子を次期国王に祭り上げようとしたのです。

王位継承権を持つ二人の王子が十五歳になると、それまで水面下で行われていた争いが、当人そっちのけで激化し始めました。

そのおかげで、王宮内の勢力図は第一王子派と第二王子派で真っ二つに分かれることに。

それは王立貴族学院においても同じでした。

これから三年間、大変な毎日になるでしょうが、精々頑張ってご自分の派閥をまとめてくださいね、王子様方。と、私は完全に他人事のように思っておりました。

ところが、学院へ向かう馬車に乗った私に、お父様は厳しいお顔でおっしゃったのです。

「スカーレット。学院内においても、婚約者としてしっかりとカイル様を支えるのだぞ」

その瞬間、私の学院生活は終わりを告げました。

なんですかね、お父様は私にストレスを与えたいのでしょうか。

昔からカイル様のことに関しては労いの言葉ひとつかけていただいたことがないのですが、私ってもしかしてお父様に嫌われていますか？

まあ、いいでしょう。私はもう昔の私ではありません。

クソガキだった王子のいじめに六年以上も耐え抜いたおかげで、どんなことがあろうと

も動じない心の強さを手に入れましたからね。学院に通う三年間ぐらい、余裕で耐えてみせますよ。

不退転の決意を抱き、青空の下、学院の正門前でカイル様と久しぶりの再会を果たした私は――

「なに？　婚約者として私を支えるよう、ヴァンディミオン公爵に命じられただと？　フン、ならば今日から貴様は私の奴隷だな！　拒否は認めぬ！　いいな！」

付き人から奴隷にランクダウンしておりました。

あの、やっぱり私、この方無理です。チェンジしてもらっていいでしょうか。

しかし、無表情のまま心のうちで叫んだところで、私の声は誰にも届くことはなく。

私は怒りの感情をひたすら胸のうちに溜め込んでいきました。

朝は男子寮の前でカイル様を迎え、彼の教室まで送り届け、昼はカイル様の昼食を買いにわざわざ王都の街まで使いっ走りにさせられて。

夕方もまた、カイル様のクラスまで迎えに行き、寮まで送り届ける。

大嫌いな人間に対して、そのように付き人じみた真似をするだけでも大変苦痛です。

だというのに、顔を合わせるたびに罵倒され、人前で侮辱され……そんなことを毎日繰り返された私の心は、以前にも増して冷たく凍りついていきました。

いっそのことお父様に逆らって、カイル様をボコボコにしてしまえば楽にもなれたのでしょう。

けれど、七歳の頃からずっとこのいじめに耐え抜いてきたという、私のちっぽけな自尊心が、安易な暴力に走ることを許しませんでした。

だって、いますべてを投げ出してしまったら、これまでの苦労がすべて水の泡。

こうして耐える道を選んだ私は、そのうっぷんをぶつけるかのように、ひたすら学業に取り組み始めました。

幼少期からわが家の家庭教師に散々しごかれてきたおかげで、剣術も魔法も得意だった私。ですが、怒りや恨みを昇華させたエネルギーというのはすさまじいもので、気づけばありとあらゆる科目において、学年でトップの成績を誇るようになっておりました。

そうなってくると、カイル様にいじめられているかわいそうな婚約者として見られていた私の評価も、次第に変わっていきます。

今日から貴様は俺の奴隷だ！拒否は認めぬ！いいな！

出直せ!!

耐えてみせますとも

スカーレット様のお顔が鬼のような形相に…

厄介事に巻き込まれるのはごめんだと、誰からも話しかけられず孤立していた私ですが、ぽつりぽつりと人から声をかけられるように。

やがて学院一の才女として私の名が広まる頃には、すれ違う生徒の誰もが振り向いて、尊敬の眼差しを向けながら挨拶してくるようになっておりました。

二人だけですが親しい友人もでき、いつの間にか〝氷の薔薇〟などという、いかにも深窓の令嬢めいた二つ名で呼ばれるようにも。

他人に自分のことをどう思われようが、基本的に無関心だった私。

けれど貴族としての体面を気にするお父様やお母様にとっては、それはもう大事なことだったようで、わざわざよくやったぞと手紙を送ってくるほどでございました。

さて、そんな私の地位向上を快く思わないお方がおりました。

言わずもがな、カイル様でございます。

常にバカにし続けていた奴隷の私が、いつの間にか自分以上に注目を浴びる存在になっていたのですから、面白くないのは当然でしょう。

その頃のカイル様は、いわゆる第二王子派の貴族のご子息たちとつるむようになってお

り、彼らと遊びほうけた結果、成績はガタ落ち。
特別科から一般科に落とされそうになっていたので、成績トップの私への怒りに拍車がかかったのでしょう。
そうしてある日、事件が起こります。

第三章　腹黒さんですねね。

それはお昼休みのこと。

授業を終えた私が、クラスメイトの方々と話をしていますと、突然乱暴にドアが開かれました。

そこに立っていたのは、制服をだらしなく着崩したカイル様と、その取り巻きである生徒が数人。

カイル様は不機嫌そうな顔でこちらに歩いてきて、私の胸ぐらを掴むと、教室中に響き渡るような大声で叫びました。

「貴様！　俺の昼食も買いに行かず、こんなところでなに油を売っている！」

そのあまりの剣幕に、昼下がりの賑やかな教室内が一気に静まり返りました。そんなに早く昼食が食べたいのなら食堂に行けばいいのに、と誰もが思ったことでしょう。

取り巻きの方々とつるんでばかりで最近一般科に落とされたとか…

ワッ!!

スカーレット貴様！

俺の昼飯も買いに行かずこんなところで何をしている！

ズイ

ズイ

ガシッ

また始まりました…

わかりました

今すぐ王都に出て買ってまいります

当の私はと言いますと、ああ、またいつもの癇癪が始まったかと慣れたものです。
やんわりとカイル様の手を押さえながら、普段と変わらぬ調子でこう返しました。
「わかりました。いますぐ王都に出て買ってまいります」
使いっ走りをさせられるのは面倒ではありますが、比較的楽な部類の嫌がらせです。
最初の頃は買ってきたものに対してイチャモンをつけられ、何度も買い直しをさせられたので大変でした。
けれどそれでは自分がお昼ご飯を食べられないと気づいたのか、最近は文句を言われないようになりました。
当然、お金は私持ちですが。
「貴様！　なんだその態度は！　俺を待たせておきながら謝罪のひとつもなしか!?」
「申し訳ございませんでした。以後気をつけます」
淡々とした私の態度がかんに障ったのか、カイル様は目を吊り上げると、お顔を真っ赤にして怒鳴り散らしました。
「それで謝っているつもりか！　バカにしおって！　来い！　仕置きしてやる！」

乱暴に私の腕を引っ張って行こうとするカイル様。するとさすがに見かねたのか、何人かのクラスメイトが立ち上がります。

それを見たカイル様は、唇の端を吊り上げ、自信満々な顔でおっしゃいました。

「なんだ貴様ら。この俺に……カイル様に逆らうというのか？　俺が誰だかわかってやっているのだろうな？」

身分を振りかざした恫喝に、立ち上がった方々が怯みます。

私は彼らに向き直ると、いつも通りの無表情で言いました。

「私なら大丈夫ですから。みなさま、どうかお気になさらずに」

「ですが、スカーレット様……」

もう一度、大丈夫と落ち着いた口調でみなさんに告げます。

カイル様はそれすら気に食わないのか「来い！」と叫び、私の腕を引っ張って、無理矢理教室の外へと連れ出しました。

「こいつらが教師に告げ口しないか見張ってろ。シグルドは俺と来い」

シグルドと呼ばれた男子生徒以外の取り巻きを教室の外に残し、カイル様はそのまま私

お前ら
こいつらが教師に
つげ口しないか
見張ってろ

シグルドは
俺と来い

はっ

シグルド・フォーグレイブ…
剣の腕に長けた
騎士見習いの方でしたね

なぜカイル様と
つるんで
いらっしゃるのか
不思議です

早く
来い！

ご家族でも
人質に取られて
いるのでしょうか

の腕を引っ張って行きます。
シグルド・フォーグレイブ。濃い青色の髪に、精悍な顔立ち。均整の取れたたくましい身体を持つ、騎士見習いの方でしたね。
カイル様といつもつるんでいらっしゃる取り巻きの一人で、確か騎士団長様のご子息でしたか。剣の腕に長けており、次期騎士団長候補とも言われているとか。
見た感じの印象では、とてもまともで誠実そうですのに、なぜカイル様とつるんでいらっしゃるのか、不思議でなりません。
ご家族でも人質に取られているのでしょうか。
そんなことを考えているうちに連れてこられたのは、人気のない特別科の校舎裏。背の高い木が生い茂っているため、隠れてなにかをするにはもってこいの場所でしょう。
カイル様はシグルド様に見張りを命じてから、私を校舎の壁の前に立たせました。
さて、今日はどんなお仕置きをされるのでしょうか。制服がシワにならないようなことならいいのですが。
「最近、少し成績がいいからと調子に乗っているそうだな」

「そのようなことはございません。普段通りに過ごしております」
「黙れ！　奴隷である貴様に口答えする権利はない！」
おとなしく口をつぐみます。理不尽な物言いもいつものことですから。
ですが、今日は少しだけ、普段と様子が違うように見えました。
なにかあったのでしょうか。
「クソ！　なぜこいつみたいなバカが特別科で、俺が一般科に落とされなければならない！」
ああ、そういうことですか。
ついにクラス落ちが決まったのですね、おめでとうございます。
誰がどう見ても自業自得であり、当然の結果ですね。まあ、それがわかっていればクラス落ちになどなっていないでしょうし、なんといいますか真性のバカですよね、カイル様は。
「貴様！　いま内心、俺のことをバカにしただろう！」
「いえ、私はなにも」

立ち読みサンプル
はここまで

「しらばっくれても無駄だ！　貴様のようなバカが考えていることなど俺にはすぐにわかる！　俺は天才だからな！」

根拠なき天才発言に、噴き出しそうになってしまいました。

どうしましょう、このお方、七歳の時よりもバカが進行しているじゃないですか。一体どうしてこうなってしまったのでしょう。

「だがバカにしていられるのもいまのうちだぞ？　クク」

不意に、カイル様が懐から短剣を取り出しました。

これにはさすがの私も顔をしかめます。

「なにをなさるおつもりですか……？」

「前々から、貴様のその長い銀髪が気に食わなかったのだ。一般科への土産に、調子づいているバカ女の髪を持っていってやる！」

いままでなにを言われようが涼しい顔をしていた私も、この発言には戦慄しました。

毎日お手入れをしている、お気に入りのこの髪を……そのろくに手入れもしていないであろう、いかにも安物の短剣で切り落とそうと？